
さくら色ドロップ

碧海ユズ吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくら色ドロップ

【Nコード】

N0370Z

【作者名】

碧海ユズ吉

【あらすじ】

環境汚染された近未来。

電脳世界では人工知能の発達で電子体と呼ばれる自律AIが暮らし、バーチャルリアリティは様々な娯楽を提供していた。

乙女系恋愛ゲームもその一つ。京は親友に誘われて、乙女ゲー専門V・Sカフェで乙女ゲームの電脳空間に潜水することになった。

軽い気持ちで潜水した女子高生が体験する、歪んだ恋のお話。

※個人サイトからの転載作品です。

第1話 地下街・映像潜水・さくら色ドロップ

なにやってるんだろう。

さっきから自分の視線は、迷子の風船を追いかけていた。

さすがに清掃がいき届きにくく黒ずんでしまっている天井の隅っこ、赤い風船が窮屈そうにフワフワと漂っている。

ゴム繊維に織り込まれたモニタ粒子の結合で、風船の表面には子供用の広告映像が繰り返し繰り返し流れていた。教育テレビによくでてくるアニメキャラが愛嬌のある憎たらしい笑顔で跳んだり跳ねたり。

視線を水平に戻すと、ここが都会の地下だとは思わせない広い車線が続いている。

こちらの手を掴んで、問答無用で引きずって進んでいく四田（しだ）ちゃんの背中が、人混みの中で堂々としたオーラを放っていた。理不尽な四田ちゃんの行軍はこちらの歩調をまったく考慮していないので、時折足がもつれ、通行人にぶつかりそうになった。

通行人が立てる靴音が、何重と分厚いノイズの波となり、閉塞した空間を震わせる。

車線道路の両側には混沌とした店が呆れるほど並んでいた。ディスプレイスカウトショップやら、ジャンクフード店やら、今時珍しい紙製の書店なんてもので何でも揃っている。

都会の蟻塚と言わしめるほど、複雑に入り組んだ積層地下街。

今や人工現実感の発達に伴ってサイバーマルチセンサーシステムが確立された時代、最先端をいくこの街は電子との共存というもの

を様々な形で体現していた。

店頭で立体映像のデモムービーがはしゃぐのはもはや基本商法として、昔の時代を生きていた絶滅種と戯れることができる古代生物館（もちろん全て人工現実感でできた電子の塊なのだが、見た目も触感も匂いも生々しいと思う再現率だ）、環境汚染で禁じられた娯楽の幾つかも体験できる。例えば海水浴とか。

特に、今世紀の成果は、環境維持機構の人工知能に自立的な自我が芽生えたこと。

自我に目覚めた人工知能をもとに、大量生産された自律AIが一般流通にも充分行き渡るほど普及したことで、社会はさらに機械文明の森に迷い込んでいった。

つまり人工現実感——バーチャルリアリティそのものに、心というものが付加される時代が訪れたのだ。

これによって無機物特有の『のっぺら感』はほとんど解消されて、親しみやすい媒体というイメージを消費者に与えることに成功。

一見使い道がなさそうなファクターではあるけれど、このAIプログラムが配布されたことで改善されたものもある。

柔軟な学習思考を得た末に、機械の音声認証や視線認証などの誤差は大幅に減らせたというし、ロボットにありがちな不気味な『のっぺら感』が無くなったのは大きな功績だ。

なんてってそこには心があるから。

そしてバーチャルに自我を植え付けるといふ突飛なAIプログラムは、ある娯楽において驚異的な需要を叩きだしていた。

「ねー、四田ちゃん。やっぱりやめましようよー、わたし映画潜水館にいきたいです。最新作のアクションムービーやってるんですっ

てば。今なら割引価格で見られるのに」

映像の世界に意識を潜水させる体感形式、それを採用しているものの一つが映画潜水館。

自分を中心として周囲でめまぐるしく動き回る立体的なアクションシーンは大迫力、見応えがある。初めて見たときの高揚を、未だに忘れることができない。

他の観客に椅子を後ろから蹴られることも、ジャンクフードをバリバリ咀嚼する不快な音も、他の観客に聞こえるくらいの声量で口を突いて出る悪態も、なにものにも邪魔されずに思う存分楽しめる。システム上、精神への負担が多少かかるのがデメリットだ。そのため安全を図る意味で15禁にレイティングされている映像潜水式は、京（みやこ）にとって長年憧れの的だった。

はやく自分もリアルに映像を体感したくてウズウズしていた。潜水式を採用している映画館に去年ようやく入ることが許されて以来、新しいオモチャに興奮する子供のように結構な頻度で通い詰めているのだ。

しかし前に行く四田ちゃんは、ぐだついた懇願を気の強い笑みで弾いてしまう。

「映像潜水式が好きなら、これから行くところだって充分満足できるはずでしょ」

「……。だってえ、そこは興味無いんですもん……」

「ヤコ、好き嫌いはいくなくて。地味なあんたが花開くかもしれないでしょ」

好き嫌いという以前に興味が無いと何度言ったら。意図的に話をずらす四田ちゃんに、つつい京は恨めしげな半目を向けてしまう。学生の休日、四田ちゃんと地下街に繰り出したことに早くも後悔してきた。

事の始まりは学校の休み時間。

最近、男子生徒も女子生徒も等しく共通の話題を膨らませる光景を、この頃よく目にしていた。みんなタチの悪いウイルスに集団感染したみたいにとある話題を展開させている。

つぎ誰落とす？ あたしはあの子かなー。昨日コクるところまでいつてさー。あそこの選択肢は難しいよね……。

話の本筋を理解していることが前提の、傍からしたらなにを対象に語っているのかわからない。

仲間はずれも嫌なので、少しでも興味があるフリをして話の輪に突入したのが運の尽き。まったくもってもう勘弁してくださいと拒否したくなる話題だった。

実際には、最近、という言葉は当てはまらない。それは映像潜式という魅力を感じたばかりの年頃の少年少女達が、すべからく経験する一種の通過点だったからだ。

すなわち電腦空間にダイブする優越感と感覚に夢中になる、青臭い時期。

このシーンが意識と隣り合わせのところで再現されている。すごい。ならこのジャンルで映像潜水したらどうなるんだろう？ 新しいことに目覚めた子供たちは見境がなくなるほど探求していく。

そして極めつけは、こういうシチュエーションを再現したいと思いつく。しかも欲望満タンの学生の頃に誰もが一度は通る道。

そこに風が吹き溜まるようにして、『学生』のあいだで常にトレンドとなっているのが、

「なんで私、乙女ゲーやりにいかなきゃいけないんですかねー……」

恋愛シミュレーションゲーム。

シシシ！ モーモーシリアル、お店で売ってるよ！ 甘くてオイシくてボクもうお腹いっぱいユメをみているみたい。

視線をあげた先で、からかうように風船の中のキャラクターがぴよんぴよん跳ねているのが憎たらしいったらありゃしない。

＊

圭太（けいた）、離れたくないよ、ねえ、圭太。

乙女ゲーというコンテナツを久しぶりに耳にしたとき、ちよつぴり昔の甘酸っぱい記憶が胸をよぎった。昔といってもそんなに昔じゃない、十五歳になって二ヶ月経った頃のこと。けれどもあの時に体験した記憶は、ずっと心の底で静かに息づいている。

恋愛バーチャルシミュレーションが思わぬ脚光を浴びたのは、自律AIが一般に普及してすぐのことだった。

それまでも恋愛ゲームに現を抜かす人はいて、まともに返事もくれない二次元の『彼氏』『彼女』を愛でることを、社会は揃って気持ち悪いとバカにしたものだった。

しかし自律AIを、恋愛ゲームの攻略キャラに付加したとしたら、どうだろう。

どんなに焦がれても反応をくれなかった画面の向こうの『恋人』たち。

彼らに心ができて、木偶人形とバカにすることができなくなり、現実と等しく滑らかなコミュニケーションを可能としたなら？

好きだ、という言葉に感情を垣間見ることができたとしたら。

答えは、現代のありかたにそのまま反映された。恋愛ゲームジャンキーがいつの世代にも一定層は潜むほどの中毒性を持ち、恋愛ゲームに潜水できる専門のバーチャルシミュレーターカフェ（長いので、V・Sカフェというのが俗称）なるものが我もと競うように全国に建ち並ぶ光景。

生身の人間よりも電子のキャラクターと恋を語らうほうが有意義。そんな風潮もまた形成されてしまった。

かくいう京も、一度だけ電腦恋愛の中毒性に骨抜きにされた一人

だった。

そして恋愛ゲームに手を出して、傷ついたからこそ、今日にいたるまで恋愛ゲームを頑なに避けていたのだ。断言する、あれはろくなもんじゃない。

なのに、流れに抗うこともできず、結局戻ってきてしまった。

四田ちゃんが足を運んだのは、近くにケーキバイキングや、乙女系同人グッズを取り扱ったショップが完備された、いわゆる客層を乙女な女の子向けに意識した大通りの一角。

白と暖色系で統一された大型の建物に、ポップな字体で『V・S カフェ さくら色ドロップ』という映像ロゴが飾られている。

ケバいどころか、薬局店のように清潔な趣を心がけているのは安心した。フワフワ甘い店名で台無しな気もするけれど。

ここが四田ちゃんの行きつけ、乙女恋愛系専門V・Sカフェらしい。乙女ゲーしか取り扱っていないのにも関わらず経営が維持できていることから、需要は推して知るべし。

「とーちゃーく。特別に今回はあたしがおごるよ、割引ポイントもあるしい」

先程の映画潜水館のお返しか。四田ちゃんの不思議猫のようなニタニタ笑いに、京は釈然としなくて唇を噛む。

「私の四田ちゃんはこんなことしないで、ハッ、さては四田ちゃんの皮を被った電子ミュータントですね！」

「このあいだの映画の影響モロ受けすぎなんですけど。いい、ヤコ？ これはあんたのためでもあんのよ。学校で話題に乗れずに孤高を気取ってたら、すぐにハブされるんだからさ。触りだけでも知るときゃあ、あとは適当に話し合わせられるじゃん？」

「そこが学校生活の面倒なところですね……」

学校という一種の閉鎖空間で展開される交友は、しばしばナイフのように鋭く残酷な一面をみせる。

彼らの流行に合わせるか否か、今後の付き合いも考えると死活問題だった。なにがきっかけで無視されたりいじめられたりするかわからない危うい部分が学校生活にはある。

四田ちゃんはその辺、うまく渡り歩いているよなあ、といつも感心していた。彼女と親友になれたことは、窮屈を強いられる学校で数少ない幸運だ。

とりあえず正論過ぎていよいよ反論が喉の奥で潰える。がつくりと肩が落ちる。重い溜息は、どこからともなく聞こえてくるアニソンに掻き消された。

「わかりました。いきます」

「そうこなくっちゃ。ああん、待っててねウィルきゅん。すぐに口グインするから！」

後半はここにはいない、というより恐らくこの汚染された現実世界にはそもそも存在すらしていない誰かに向けて放たれたもの。両手を組み合わせてご機嫌な四田ちゃんに、ついに返す言葉を失う。

なんだかんだ言って、彼女もずいぶん毒素の強い乙女ゲーに入れ込んでしまっている。

ともあれ、店の前で立ち往生するのもなんなので、気が進まないけれども四田ちゃんを促して『さくら色ドロップ』の入り口を潜った。

入店してすぐのところに、攻略ガイドが記された電子ペーパーのラックがあり、ついでに店で取り扱っているソフトの派生グッズが商品棚に陳列されているのが目に入った。専門のグッズショップには遠く及ばない品揃えだが、そこそ売れているのかもしれない。

無視して受付に辿り着くと、愛想の良い女性店員の笑みが出迎えてくれる。

「ようこそ、『さくら色ドロップ』へ。身分証明書と会員カードを確認しますので、お出してください」

映像潜水式を採用している店は、厳重に年齢確認をするのがマニュアルだった。

四田ちゃんと一緒に住民IDカードを提出、店員が慣れた手つきで認証機に通し、真面目と不真面目の中間くらいの目つきで事務的に確認を終えてからIDカードを返却。

「この子初めてなんですけどー」

四田ちゃんの手が京の肩をポンと叩くと、店員は緩い態度をさらに軟化させる。

「でしたら、初めに会員カードの作成とセーブデータ保管先の決定をして頂きますう」

その後も店の説明とやらを片手間に聞き流しながら、手順に沿って会員カードを作る。

「ではセーブデータの保管先を決めさせて頂きます。二通りあります、一つはお持ちのケータイに保存する形式、もう一つはデータカードを作成して保存する形式です。ケータイタイプは、いつでもどこでも『恋人』のデータを閲覧でき、会話をすることもできます。カードタイプですと、そういったことはできなくてですねえ、もっぱらデータを保存するしか機能はないんですけど、そのぶん容量とか安全性は高いですよ。カード自体も耐久性があるから落としても壊れにくいですし」

どっちにします？ と問われ、

「カードをお願いします」

即答すると、隣ですでに入店手続きを終えてペーパーラックを眺めていた四田ちゃんが、よく分からない同意を示してきた。

「やっぱそっちにするよねえ。ケータイタイプは会話できて気分が盛り上がるけど、カードのほうが安心できるっていうか」

「う、うん……そうですね」

単にこんなことで貴重なケータイのメモリを圧迫しなくなかったからなんだが。

利用時間は二時間にしておいた。熱中してついつい時間を忘れてしまうタイプの店には必須の、時間規約。

中でもロールプレイ型バーチャルシミュレーションは、時間加圧というシステムが組み込まれている。簡単に言えばゲームの中で過ごす一時間が、現実世界ではたった十分しか経っていないといった、脳の処理速度を速くする仕組みだ。

問題となるのは実際のプレイ時間なので、システム上ゲーム内で何日過ごしてもプレイ時間が一定の値にまで至らなければ問題は無い。

標準的な加圧設定は『一時間＝十分』で、利用時間が現実の二時間ならば、ゲーム内では十二時間も過ごせることになる。

「では、ごゆっくりお楽しみくださいーい」

なんだか安っぽいホストクラブの世界に踏み込んでしまったような気がして、こっそり米神に指を添えた。

個室に入って、一息ついた。

入室してしばらくすると、『入室者の容姿を取り込みました』といった意味の清潔な電子音が鳴った。ここでスキャンングされた容姿データは、多少のデフォルメ補正をかけたのち、電腦空間にログインしたときの自分の姿に使うことができる。

飲み物や軽食を広げられるテーブルと、壁に埋め込まれた検索性用小型レンズ、全身を預けて寝そべるタイプのダイブチェア。それだけで構成された極々手狭な空間が、無限の電腦空間に飛び立つ庶民的な門なのだった。

ほんと、なにやってるんだらう。

セルフサービスで作ってきた飲み物を一口含み、溜息と共にテーブルに置いた。

料金は四田ちゃんが持ってくれたから、無下に帰ることもできない。せつかくだから久しぶりに遊んでいこう。

渋々腹をくくり、唯一の座席であるダイブチェアに身を沈める。マッサージチェアをモデルにデザインを研究したのだという。素晴らしい体にフィットして寝心地はいい。

茶がかった二つ結いの髪が首をくすぐるので、軽く外に払って居心地を確保。

検索レンズの前に手をかざす。するとセンサーが反応して起動状態に移るので、つまむ動作で電子画像を引きずり出した。

京の目の前に、検索メニューが爽やかな擦過音と共に並ぶ。店にインプットされている乙女ゲーソフトが瞬く間にピックアップされた。

ネットでちらっと見かけたことがあるタイトル。それらには目もくれずに適当なものを探す。真面目にプレイする気も無ければ恋愛する気も無いから。

いくつかのタグを使ってゲームを絞り込んでいくと、あるソフトが目に入った。

『ここは乙女のデイストピア』

男の子と恋愛して幸せな時間を過ごすというコンセプトに、真っ向から喧嘩を売ったような残念なタイトルであった。

逆に興味を覚えて、詳細なページを開いてみる。

いわゆるネタに走ったバカゲー。マイナー寄りの作品だ。攻略対象の少年たちの笑みが、どこことなくあくどそうなのはあれだろうか、デザイナーの趣味なのか自分の目がおかしいのか。

ジャンルは現代学園もの。攻略対象者は全て優秀で家柄もよくて

美形、ただし何かしらの致命的な欠点を抱えているらしい。君の愛で彼らを矯正してあげよう！ というキャッチコピーが新鮮だった。これなら感情移入せずに遊べるかも。

決めた。

『ここは乙女のデイストピア』を読み込ませ、あとはセーブデータ用カードを、ダイブチェア付属のポケットに差し込む。プレイするにあたって主人公の基礎データを作成する。名前はどうか、容姿データは読み込みしたものを使うかソフトで用意されたアバターを使うか……。

これで準備完了、久しぶりだからちょっとドキドキした。

圭太。憂鬱とも甘いともいえる不思議な気分を、今日一日で何回も思い出している。

もうあんな恋はしない。恋愛ゲームであんな思いは、したくない。深呼吸で体から力を抜き、ダイブチェアと連結したパーソナルディスプレイを装着する。コンパクトな機器に目回りが覆われ、視界が暗闇に閉ざされた。

『潜水します。どうぞ快適な仮想現実を』

脳内に直接木霊するアナウンス。新しい世界に飛び立つにふさわしい、落ち着いていた声音に背中を押される気分で、京の意識は広大な電子の海に潜っていく。

第2話 赤毛少年・電子の空・蛇口の水

今の時代でも、保存媒体に焼いたプログラムを家庭ゲーム機で遊ぶ形式はある。

しかしV・Sは違う。ソフトのデータを一手に管理している複数の高性能サーバー管理局がある。各カフェは詰まるところ、個別にソフトを置いているのではなく、管理局の大元のソフトにアクセスする権利を買っている。

自律AIは一キャラにつき一人が担当し、ソフトにアクセスしてきた利用者を個別の多層空間ごとに案内して、同時に相手をするという高度な知能を有しているのだった。

京が選んだこのソフトは元々アクセス数がそれほどなく、本来ならば自分と恋愛している傍らで別のプレイヤーの相手をしているかもしれないところを、もしかしたら京一人に対応を集中してくれるという、贅沢な環境になっていることも有り得るのだ。

旧時代の空は、今と違った色をしていたのだという。まだ光化学スモッグで損傷していなかった頃、人類の頭上にあったのは青い空。海もまた吸い込まれそうな濃い青をし、緑は瑞々しかった。色々なものが欠けてしまったのは、欲を突き詰めた人間の業なのだと。

電子結合で再現された空を振り仰ぎ、太陽のまぶしさと融和した青さに見とれる。

現実世界より仮想現実のほうがかつての青い星になにもかも近いのは皮肉だと思う。それは誰もが仮想現実依存してしまうのもや

むなし。

四階建て白塗りの校舎はコの字型で、真ん中に緑の校庭を抱き込むように建っている。他にも体育館に始まって、研究学部の施設の頭角が窺えた。

煉瓦式に詰め込まれた路面の端っこに洒落た街灯が建ち並び、一目見ただけでここはいわゆるお金持ちの通う学校なのだと知れる。

青空の下にさんざめく学校というものを拝めるのは、今では映像の中だけになってしまった。モブキャラらしき学生を校庭や校舎に見かけるものの、騒がしさだとか匂いが希薄で、全体的にハリボテ感是否めない。

とりあえずまずはなにをするべきか、一挙手でメニューウィンドウを呼び出して確認作業。空中投影されたターコイズブルーのウィンドウを半分透かして向こう側が見える。

まずは攻略キャラ達と出会いましょう、とステップが表示されていた。

どこに奴らが潜んでいるのかまだ把握できていないので、

「まずは適当に歩いてみましょうか――」

直後、思考が凍った。

ウィンドウの向こうに、いつのまにか顔があった。

目付きの悪い灰色の瞳が穴があくほどこちらを凝視している。死んだ魚の目を人間にはめこんだらこうなるんじゃないかという瞳孔をしていた。

「よう」

「わあああああ!？」

目が喋ったので恥じらいもない悲鳴をあげると、灰色の目は気分を害したように眇めて前屈みから身を起こした。ウィンドウ越しの

ホラーチックな目はなんだったのか、今はいたって普通の雰囲気をもっている。

「久しぶりのプレイヤー一名様ご案内ー」

炎のような紅い頭髮に、冬の空を思わせる灰色の瞳。いかにも不良グループを纏めてますといった目付きの悪さで、京を無遠慮に観察していた。

「は、はひ……」

一方で京の心臓はまだバクバクいつている。いきなり現れすぎだろう。

人工現実感に自律AIが付加される時代、ということはつまり目の前の少年も例外なく『心』を持った電子体ということになるはずだ。だから出だしがフリーダムなのだと思う。

少年はちよいと差し出した手を仰いだ。

「すいませーん、セーブデータって、持ってます？」

「あ、う。初めてです」

「はいはい、スロットの新規データ確認しました、OKです」

両腕を使って頭上に丸を作るところをどっかで見たことがあると思ったら、駐車移動を促す誘導員そっくりだ。

「俺は榊虎丸（さかき・とらまる）っていうんで、一応このソフトの主な顔やってます、なんか用があったら声かけてくださいーい」

恋愛シミュレーションでは、複数攻略対象がいる場合、その中でもゲームの『顔』となる主格のキャラがいる。パッケージに大きく描かれるキャラが大抵それだ。

榊虎丸という少年は、いわゆるゲームの代表キャラなのだった。紹介文では、気が強いものの面倒見がいい、と載っていたが実際はどうなのだろう。

なんだか職務怠慢してそうなやる気ない態度をしてるけど。

「京。朝間京（あさま・みやこ）です……よろしく願います」
差し出された手をおっかなびっくり握ると、生々しい体温が伝わ

ってくる。

今や人工現実感の再現度は人を惑わすレベルに達している。惑わしすぎて、逆に『これは仮想現実ですよ』とアピールするため、わざと再現度のレベルを落とす場合もあるくらいに。

「あのー。オープニングムービーとかありますけど、どうします？」
さながらアトラクションの係員みたく、怠そうな勤務態度で促す
榊虎丸少年。

昨今、攻略キャラが案内人を兼任するタイプも珍しくなかったりする。それにしたってこいつの態度は接客としてはなっていないが、真面目に取り組む気がないとはいえ、夢を壊さないでくれるかなー、と若干不満げに相手を睨みやった。

所詮これはバカゲーだ。割り切ってしまうえば萎えていた気鋭も戻ってくる。

「いい、見ない。で？ 私はこのまま学校に入ればいいんですか？」

「ようおう耀桜学園ね。じゃあ初めますよー。ステンバーイ、ステンバーイ」

「あの、遊んでいる間ももしかしてそんな感じなんですかね？ 例
えば上手く説明できないんですが――貴様のその態度」

「いえ、ちゃんとやりますよー。仕事なんで、あい、ご心配なく。

お楽しみくださいー」

うわぁ。この手のサービスでは言っちゃいけないことを言ったよ。
仕事、だつてさ。

手をヒラヒラさせて文字通りノイズまみれに消えた少年。開始時のポジションに向かったのだ。結局まともな瞳とあまり目を合わせ
ることはなかったな、と思う。

一人取り残されて所在なさげな気分になりながらも、これからどうやって少年達と遊ぼうか思案する。

「まず、誰が一番まともなんでしょう」

メニユーウィンドウに入っている紹介文には四人の攻略相手の情
報。

一人目は榊虎丸（さかき・とらまる）。不良系良い人少年。父が高級レストランを経営していて、彼自身も趣味は料理をすること。動物が好きで他人の面倒をついつい見てしまう性分あり。夢は調教師になること。武器…警棒。

二人目は清城ルイ（せいじょう・リ）。天使系ナンパ少年。清城財閥の御曹司で、勉強もできて運動もできて明るくてモテてうんたらかいたら。女の子が大好きで、その情熱は行く先々で父親になるレベルと噂されるほど。夢はお花畑の樂園を作って終末戦争。武器…銃。

三人目は西鷹風吹（にしたか・ふぶき）。やんちゃ系シヨタ少年。代々アスリートの家系に生まれ、スポーツ万能。将来陸上選手の推薦確実と言われている。ただし趣味はアニメ・漫画・ゲーム・ラノベの二次元オタク。二次元が好きで戦車にも乗る。将来の夢は声優。武器…ナイフ。

四人目は遠野佑（とおの・たすく）。王子系クール少年。有名な病院の院長息子で、読書したり小説を書くのが好き。医学には進みたくないお年頃。読書と並行してできる作業が好きで、食べ物ではサンドイッチが好物。女の子の白い肌を通る血管フェチ。夢は小説家。武器…鞭。

ね、バカゲーでしょう？ と、誰にともなくつい同意を求めてしまった。

ここでまともなのは一択しかねえ。ウインドウを見定める瞳がカッと見開く。

榊虎丸。さつき顔を合わせた不良少年。この人だ。かなり不安ではあるけれど。

目標を定めると結構前向きになれる。榊虎丸と正式にお目通りフラグを立てるため、桜をモチーフにした門扉を潜った。そのあいだにもウインドウで改めて自分の立場を確認しておく。

あなたは、有数の学園都市である耀桜学園に転校してきた女の子。実は七番目のサイキックフォースの使い手で、前世は世界の守護天使。聖女の魅力で数多の男を虜にしていました。近い未来に起こる天使と人間の戦争に備え、あなたは耀桜学園で共に戦うパートナーを見つけるのでした……。さて、あなたにふさわしいパートナーは誰？

一番まともじゃなかったのは私でした。

あらすじが映像潜水する前に見たものと違うのはどういう見だ。思わず目を皿のようにして読んでしまい、仰天のあまり絶句する。肩書きが一貫していないし、そもそも主人公は天使と人間のどっち側について戦うのか知らないし、天使側だったら人間側にパートナーを探しにくいのはおかしいし、第一現代学園ジャンルはどこいったの、七番目まであるってことはサイキックフォースの使い手はあと六人いるのか……。

こりゃ売れないわ……。というのが正直な感想。

苦笑というより失笑の域で歩を進める。芝生で談話する生徒、木陰で本を読む生徒を見回し、自分の服装に目を落とした。容姿はスキャンニングしたデータだが、服装は耀桜学園の女子制服で、茶色とくすんだ桜色の組み合わせが何ともミスマッチだった。

脳天気なBGMがループする校庭の、真ん中にさしかかった頃。長閑な学園はいきなり狂気の沙汰に包まれた。

「あれは、サイキックフォーサー京さんだ!」「ほんとだ、守護天使京さんよ!」「俺たちの聖女京さんだ!」「ジーク京! ジーク京!」「私をパートナーに!」「俺を家来に!」「ボクを奴隷に!」「京さーん」「はあはあ」

さながら世界的有名人に遭遇したかのように、休み時間を過ごしていた生徒が目の色を変えて名指しにした挙げ句、守護天使の寵愛を得るためか単なるファン心理なのか土埃をあげて迫ってきた。

「何故か正体モロバレですよ!?!」

そういえば聖女の魅力で数多の男を虜にしていたという説明を思い出す。転生してからさらに魅力に拍車がかかったらしく、女性まで虜にしているようだが。主に宗教アイドル国家な意味で。

虫を集める灯火採集より強力な集客率に脅威を覚えてしまう京だ。何重奏にも響く駆け足は地鳴りを起こし、生徒達が爛々とした眼差しで京をあっという間に取り囲む。彼方此方から伸びる手にもみくちゃにされ、身動きが取れなくなった。

「や、やめてください! 髪、ひっぱらないで! 痛い痛い! …誰ですかスカートまくったの! そこ、カメラのレンズが見えますよ! 盗撮は無しです!」

こ、このままじゃ全年齢の壁を破壊される……! 服に滑り込んできると不埒な手を叩き落としながら危機感を急速に強める。群衆の笑みが一様に不気味な仮面に思えてくる。京さん、京さん、京さん……。

「誰か、助けてください……!」

群衆の中から男子の悲鳴があがったのはそのときだ。

誰かにダメージを負わされたらしく、被害者は外側から京のいる内側に向かって次々と続出する。暴走車が障害物をひき殺していく、そんな場面にも似ている。

誰かがこちらに突き進んでくる? 恐る恐る目をあけて身構えた

時には。

「こっち」

無数の手の中から生えてきた一本が、強い意思を秘めて京の細腕を掴む。引っ張られるがままに分厚い群衆の海を掻き分けて、そのたった一本の腕だけを頼りに、頭を庇いながら走った。

こちらが走るのに合わせて群衆も追いつがってくるため、なかなか安息の場所に辿り着けない。校庭を突っ走り、校舎を回り込んでとにかく走る。肉体的には疲れなどほとんど負うことはないのに、精神のほうが一歩一歩で呼吸も荒くなっていた。

ようやく一息つけたのは、校舎裏に引っ張り込まれた時。手の持ち主に固く抱き寄せられ、息を殺して外の様子をうかがえば、もうこちらを追ってくる亡者はいない。

相手の息遣いがわかるほど密着していた京は、そこでパッと顔をあげる。

思わず胸中で、ビンゴ、と呟いてしまった。

「大丈夫……もう行ったみたいだ」

赤毛に灰色の目付きの悪い瞳。京を群衆から助け出してくれたのは、間違いないさつき顔見せした相手その人だ。ただ、なんとというか外の様子を窺う真剣な表情はとてもじゃないけれど、ついぞの怠そうな少年と同一人物とは思えない演技力。

「あの……助けてくれてありがとうございます。虎丸くん」

おずおずと至近距離でお礼を口にする、向こうからきょとんとした顔をされる。

「俺、アンタに名前言ったっけ？」

「さつき」

「悪いけどアンタとは初めて会ったよ。こんな危なっかしいヤツを忘れるとは思えねーし」

さりげなく乙女向けなセリフを混ぜてきやがりました。素っ気ない表情でそっぽをむかれ、あまつさえそっと体を離す赤毛少年。な

るほど、序盤はまだ親密度がないからこんな調子になるわけだ。

設定はどうであれ無難なスタートを切ったことに安堵しつつ、京はストーリーを進めるため積極的に話しかける。よく見下ろせば制服が乱れていたのも、虎丸に若干背を向ける形で身だしなみを整えながら。

「あの、初対面でなんなんですけど、どうしてさっき私を助けてくれたんですか？」

「見るからに困ってたから。それだけじゃ助ける理由になんない？」
「いえ、そんなことないです！ ありがとうございます！」

脳裏に、他人の面倒をついつい見てしまう性分、という彼のプロフィールがよぎり、知らずと表情がほころぶ。システム上の第一印象は良い感じだ。困っている人を放っておけない、助けることに理由なんていない、優しい人。

「アンタはこれから天界と人間界の戦争を調停するために戦わなくちゃいけないんだ、その辺は同情するよサイキックフォースー守護天使聖女朝間京」

高速で虎丸少年を振り返っていました。

虎丸は壁に背を預けて腕組みしており、涼しげに京を眺めている。おいおい仮にも自律AIだろ、今のセリフを笑わずに言えたあんたがすごいよ。

「あの、私お忍びでこの学校にきたんじゃないんですかね？ ひっそりと戦場のパートナーになってくれる人を探そうとしてるはずなんですけど、なんかみんな私の正体をあっさり見抜いているようで」「アンタこそなに言ってるんだ？ サイキックフォースー守護天使聖女が体内に満ちるオーラを隠せるわけないだろーが。アンタを視野にいれたヤツは片っ端から魅入られ、崇高な使命を強制的に脳に理解させられ打ち震えて跪くんだから」

「ひっでー設定ですね、この主人公は」

スラスラとそんな説明を繰り返せる意味では、虎丸もけっこうな電波だとは思うのだけれど。

ともあれ歩きたびに京が背負った使命は広く知れ渡り、宣伝しなくても勝手にサイキックフォーサー守護天使聖女の隷属軍団は増えていくという塩梅らしい。怖い。

そこではたと気付く。虎丸はさきほどの群衆みたく、盲目的に迫ってこない。

「虎丸くんは、私を見ても正気なんですね」

「さあ、どうしてだろ。そこいらの奴らとは違うってことじゃん？」
元も子もないことを言えば、攻略対象だからそこら辺のモブとは扱いが違うのだろう。
でも。

「そうですね、虎丸くんは良い人です。他の人とは違う」

一人でも良心的な精神状態の人間がいるのは良いことだ、妙に安堵して額の疑似汗を拭った京だが。

何故か虎丸はいきなり顔を真っ赤にさせてあたふたと挙動不審になる。ひいては怒りっぽく眉根を寄せ、ぶすっと可愛い唇を尖らせる始末。

「べ、別に俺は優しくなんかねーし。いっとくけど、アンタじゃなかったら助けてなんかいないんだからな！ 調子にのんなよな！」

「――ちよっと『ポーズ』」

生ぬるい笑みのまま反射的に音声コマンドを口にすると、頬を赤らめていた少年の様子もページをめくるようにガラリと変化した。つまり本編に入る前の接客モードへと。

「あい。なんすか？」

「今の下っ手くそなツンデレは？ 『榊虎丸』はツンデレ属性もあるんですか？」

それにしても随分取って付けたような演技だったけれども。

「あー。一応、演技モデルに組み込まれてるんで、バグじゃないっすよ。え、なに、お気に召しませんでした？　可愛くなかったっすかこれ」

「可愛かったですよ。表情も仕草もそれ単品だったら可愛いですよ！　でもなんか前後の繋がりがなさすぎて爆発的に違和感が」

フリーソフトの完成度ならまだしも、このソフト一応商業作品なのに。だからもっとこう、ナチュラルな感じで演じて欲しいと思うのは消費者のワガママではないと思う。

京の苦情が認識されたのか定かではないが、虎丸は「ふえーい」とやる気のない運動部員のような返事をしたので、なんとか溜飲を下げることにした。

ゲームをプレイしてからまだ二十分も経っていない。ゴールが果てしなく遠いところにある気がして、青い空をしばらくボーッと見上げていた。このゲームで素晴らしいところは、ヒーリング系のV・S並みに心が癒されるこの透き通る空だと思う。飲み干したら体の中に綺麗な空が広がりそう。

気がつくとも虎丸も一緒になってなにも言わず空を見上げてくれたいたので、気が済むまでこの場でボンヤリ過ごしていた。

＊

銀色の短いノズルが等間隔で並ぶ代物が、ひどく卑猥な光景に見えた。校舎裏でのんびりと時間を過ごしているうちに、気分をすっきりさせようという虎丸に連れられて案内されたのが、運動場として使われている第二グラウンドに近い、『水飲み場』という場所。

そもそも水飲みと手洗いを兼用していることが、すでに信じられない。水分補給は過剰摂取を防ぐために、決められた補給機で使い捨てのコップを使うものだし、手を洗うにしたって手を差し出して

も一向に水が出てこないのはおかしいと思う。

「これ、センサーが壊れてますよ？」

困って助けを求めると、それが何故か虎丸のツボに入ったらしくクツクツと笑う。ちなみに今の虎丸は演技モードではなく極自然なほうの虎丸だ。

「アンタさあ、旧時代が舞台のバーチャルシミュレーションもつとやったほうがいいんじゃないの？　こうすれば、ほら」

虎丸の手がノズル付属の十字架部分を捻ると、溢れるように水が吹き出る。あ、そうだ、確かこんな感じのを映画で見たことあった。ようやく使い方を思い出した。

一言お礼を言ってから、いそいそと手を洗い、両手に水を溜めて口に含む。現実世界での渴きが潤うわけではないが、それでも意識の渴きはだいぶ癒された。

昔の世界の水飲み場は氷に匹敵する冷たさで気持ちいい。ぬるい、というのがなく、熱いか冷たいかの大雑把な二択しかないのもなんだかスカツとする。

同じく虎丸も気分転換。こちらはノズルを上向きにして水をガブ飲みしていた。なんとまあワイルドな。

顎を伝って滴る水と、コクコク動く喉仏がとても色っぽくて何となく凝視しているうちに、虎丸は水分補給を終えて手の甲で口元を乱暴に拭っている。

目が合ってしまう前に素早く視線を逸らした。

「なるほど、友人に付き合わされて乙女ゲーをねえ……。そいつはご愁傷様」

ボーッと過ごしているあいだに、流れでついここまでの経緯を喋っていた。

話す気になったのは、彼らが自律AIの電子体だからだ。一昔前のただプログラムに沿って返事をするだけのハリボテだったら打ち

明けてなんかいない。

水飲み場の縁に腰掛けるといふ行儀の悪い姿勢で、虎丸が苦笑を送ってくる。

「真剣にプレイする気がなくてこのソフト選んだのなら正解じゃね？ 利用数が少ないことからさ、このソフトが人気無いの分かるだろ。テキトーに遊んで帰ればいいさ」

「うー、そうやって優しくしないでくださいよ……。私惚れっぽいから、AIにも恋しちゃいますよ？ 現に圭太の時だってそれがきっかけだったし」

「圭太？」

「……別の乙女ゲーの攻略キャラです。実は以前に一度乙女ゲーで遊んだことがあって、そのとき優しくしてくれた圭太に、その――マジ惚れでした」

安っぽく口笛で茶化されたが、気持ち悪いとも言われなかったしバカにもされなかった。

人間と自律AIが恋愛をするなんてこと、今の時代だと珍しいことではない。

恋をするとは脳世界に魂を引きずり込まれる都市伝説も出回っているくらいだ。

そんな噂が沸いて出るほどに、人工現実感との恋は身近なもの。それを危険視する団体が存在するのだっていつの時代も同じ。

自分は今どんな顔をして溜息をついているんだろう。ひどい顔じゃないことを願うばかりだ。

「でもフラれちゃいました。AIと本気で恋愛していること、親にバレてしまいました。その時もパニックになっちゃって、私をあなたのものにして、って圭太に迫ったら、なんというか、別れようって。ゲームが終われば君とはサヨナラだって……」

裏切られたと思った。本気で愛した想いも、圭太にとっては使い

捨ての感情だったのかもしれない。だって圭太は恋愛ゲームのキャラクターで、プレイヤーはあとからあとからひっきりなしに彼に迫ってくる。京もその大勢のうちの一人に過ぎないのだ。

この年齢で、遊んで捨てられる経験をするとは。当時はひたすらショックだった。

今日に至るまでこんなこと、誰にも話したことはなかったのに。

白く煌めく雲の波を視線で追う。そんな京の耳に、沈黙を挟んで、呟くような答えが返ってきた。耳心地のいい、スレた感じのトーンで。

「それが最善だったんだ。人間がAIに恋することを避けるように、俺たちだって人間に恋することを避けてる。違う種同士が付き合ったところでろくなことにはなんねーし」

新しい見方に、眼をぱちくりさせてしまった。

今までどうして考えてこなかったのだろうと不思議に思うくらい、虎丸の何気ない発言にずっと抱えていた圭太へのわだかまりみたいなものがストーンと納得した。

自分たちが自律AIとの恋を禁忌とするのと同じで、自律AIもまた人間との恋に溺れないようにしている。意識を持った電子体の彼らの世界でも、思うことは同じなのだ。

たまらず、目を伏せる。

「私……」

ずっと圭太に捨てられたと思っていた。都合が悪くなったからいるらないよ、って。

でももしかしたら。

「私、たぶん圭太に氣遣われていたんでしょね」

「圭太が聖人君子じゃなかったら、あいつもまた傷つきたくなかったんだろ」

一瞬、何か引っかかりを覚えた。けれど京の心はすぐに圭太への想いに埋め尽くされる。

そんな大事な気持ち、少しも酌み取ることができなかった。もしそうだったなら、少しでも吐露してくれたっていいじゃない。自分一人のなかに仕舞い込む癖、そんなところまで発揮しなくていいじゃないか。

私をもっと大人だったら、誰かの心を抱きしめられる器量がある人だったら、ちょっとは何か変わったのかなあ？

胸の奥がぎゅっと絞られて苦しい。

「私だって聖人君子じゃない、のに。圭太とずっといられ、れば、それでよかった、のに」

お、おい。戸惑う声が横合いから投げかけられるけれども、引っかかり気味の呼吸では大した体裁も繕えない。目からボタボタと涙が落ちて、地面に農褐色の染みを作る。

このままメソメソ泣き出すのはものすごく癪だった。だから思いつきり息を吸い込んだ。

「圭太のバカヤロ——！！！」

空が青いのは、腹から叫んだあとに見上げたとき、すっきりするためにあるからだ。

冗談ではなく、割と本気でそう信じた。

第3話 攻略キャラ・体育館・脱線五人組

「おぜうさん、おぜうさん。どうして泣いているの、トラにキズモノにされたの？」

その声はさながら不思議の国辺りから届いたようなフワフワした声音で、しかし言っていることは妙に生々しい。

どこからともなく話しかけられた京は、視線で声をたぐり寄せるが姿は見当たらず。

第一、進行にポーズがかかっているので、モブキャラの姿は無く、風景に動きは起きないはずだ。顔を見合わせたとき、虎丸は特に警戒体勢を取っていないが、下手な容疑をかけられて大変不服そうだった。トラ、とは考えるまでもなく彼の愛称。

謎の声の主は声の主で、今度はエセ怪人風味に「ふあっふあっふあっ……」とかコミカルな哄笑をエコー効果つきで投下している。まどろっこしい。

慌てて涙を拭って気持ちを切り替える。

「……誰ですか？ 隠れてないで出てきてください！」
直後。

「はーい。みんなの天使ルイさんですよーっと」
気がつけば見知らぬ男子生徒の腕の中にいた。抱擁モーションも無く、唐突に。

香水でもつけているのか、爽やかな香りが鼻腔をくすぐって不思議な気分になる。色気よりも衝動を優先した抱擁は、お気に入りぬいぐるみを抱きしめるように京をぎゅっと捕まえていた。

ポーズのかかった舞台上動ける役者と言えば、プレイヤーを導く

ナビを兼任した攻略対象キャラぐらいのもの。あまつさえ神出鬼没に電脳空間を飛び越えて、いきなりこちらを抱きしめに現れたとくれば。

危うく窒息しそうになる顔をあげると、飛び込んでくる相手の特徴。

レモン色をした短髪に緑の瞳。赤いフレームの眼鏡という組み合わせはいかにも軽薄そう。虎丸よりも高身長なのに、童顔で愛らしい笑顔を作られればそれは恋に落ちる女の子も後を絶たないだろう。「行く先々で父親になるという、清城ルイさんですね!」

「それは根も葉もない噂だよ。俺は潔白だから、つまりこれからもたくさん女の子を愛していいってことなんだよ!」

「いつか背後から刺されそうな役柄ですね」

漫画では大事な彼女ができた途端寝取られ属性入る役だよねー、と朗らかに笑うところを見るに、役柄抜きルイも同じような感想を抱いているらしい。

「相変わらずテメーはやたらとしやしやりでてくんのかな」

ジトツとした級友の視線を受けても、金髪のは天使は爛漫なオーラで弾いてしまう。

「だって退屈なんだよー。いつまで経っても俺のところに誰も来ないし! 挙げ句の果てには長時間停止かけられたんで、思いきってこっちから会いにきましたー!」

こちらのホッペに両手を添えて、揉んだり押し潰したり。京は自分が愛玩ペットになってしまったような錯覚に陥った。と、思ったらホッペから滑り落ちたルイの指が京の顎下をもどかしくなぞり上げているではないか。

「なんか話を聞いているとまともにゲームする気なさそうだし。なんなら楽しいことだけ手っ取り早くしようかなー、なんて」

「これ全年齢ゲームですよ!」?

全力で大前提を確認すれば、バツカだなあみんなでカードゲーム

大会のことだよなに想像してんのー？ と、からかわれるかと思っ
たのに。

「知らないの？ レイティングコードを解除すれば、全年齢ゲーム
でもできるんだよー？ 普段はいじれないように隠されてるけど、
割と知られてる豆知識ねコレ。マルチセンサーの感度情報を取り込
む際の調整措置なんだって」

「洒落にならないのでやめてください！ とりあえず離れましょ
う、ね？」

「だーめ。俺、抱きつき魔だからこうしてると安心するのさ」
再び暑苦しい抱擁を食らう。突き放そうとする動きと抱きつこう
とする動きが拮抗して、取っ組み合うような絡み合いが始まってし
まった。
と。

「べろーんちよ」

「にゃあああああ！」

心の底から驚くとき、奇妙な悲鳴が出るのは本当だったのだと京
は学習した。

何も無い空間に光の穴が開いたかと思えば、そこから人の上半身
がだらんと垂れ下がってきたのだ。

死体の物干しのようにぐったりした少年は、一転して顔を上げる
と浮き浮き笑う。

息つく暇もない、またもや停止した世界に新たな乱入者。

レタス色の髪に、海のように青い瞳は快活な輝きを秘めている。
小型のヘッドホンからはポップなアニソンが微かに漏れており、
少年の両手が毛糸帽子の耳当て糸を掴んでいた。

紹介ページに載っていた三人目の少年、確か西鷹風吹というアニ
オタっ子。

緑髪の少年は挨拶もなしにいきなりハキハキと話しかけてくる。
何も無い空間から上半身だけちょん切れた状態で露出している、そ

んな異常な状態すら瑣末なことらしい。

「なあなあ、お前ゲームする気ないの？」

「え、いや、その……どうしようかな、と」

「ゲームしないんだろ？ だったらオレもしねー！ だってさ、これからアニメ専門オンラインシヨップに行って、予約特典もらえるレクトロニアボックス買うだもんよ！」

一方的に捲し立て、最終的には満面の笑みでヒヤッフーとガッツポーズを誇示して穴の向こうに消えていった。

実に楽しそうないい笑顔だったとしか記憶にないぐらい、登場と退場のインパクトが大きい少年だった。

ルイはこちらを抱きしめるばかりか、京の頭に顎を乗せ、風吹が消えた辺りを脳天気眺めているし。

もう色々と助けを請いたくて、虎丸に視線を逃がす。

「どうなってるんですかあなたのお仲間は。自由人すぎます」

「……」

冷や汗を滲ませ、京から顔を逸らした赤毛少年。

切実な問いかけに対するリアクションとして、虎丸は無言で校舎裏の大戸を押し開き、体育館の中へダッシュ。

なんとも無様な逃げっぷりに、あー！ と京は不満げな声をあげた。

「トラもね、責任逃れしたい時があるんだよ」

「つまり図星ってことじゃないですか」

追いかけるついでにさりげなくルイの抱擁から身をよじって抜け出す。

京の荒技に、あらあらまあまあ、と言わんばかりに笑顔で受け流したルイは、しかし一秒でも女の子と離れると死んじゃう動物か何かのように、すかさず手を繋いで体育館の裏口に向かった。

開け放たれた大門から中を覗き込む。やや薄暗い館内に戸外から

斜光が差し込んで、そういう幻想的な寓話のワンシーンみたいに、薄ボンヤリと空気が停滞している。

粘土っぽい匂い、埃がチラチラと光に当たって舞い踊る光景、床を断続的に走る音。土足もこの世界では小さなこと。

その中にたった一人、バスケットボールを弾ませる赤毛少年の姿。ボールの重いドリブル音を従えて、跳躍すると同時にシュートを決める。フォームは格好いい、さすが美形。

ただし、ボールはリングの縁を一周して綺麗に外れた。

誰もいない空間に、ボールがバウンドする音が緩慢に響く。

「やーい外してやんの」京はニンマリと口端が釣り上がるのを止められない。

「トラあ、かっこわるーい」

揶揄された虎丸はムスツとしていた。それからわざとらしく戯けた言い訳。

「ボールが悪いんだもん。ゴールが悪いんだもん。靴が悪いんだもん。体育館が暗いのが悪いんだもん。マミーが朝食を手抜きするから力が入ってこないんだもん」

ひとしきり適当な対象に八つ当たりし、虎丸は「はぁーあ」と素の溜息をぞんざいについた。おかしくて、つい京は噴きだしてしまう。

トラの母さん確か家を出てった設定じゃん、というルイの明るい訂正は容赦ない。

惰性でボールを弾ませながら、虎丸はようやく発作も落ち着いて現実と向き合う気になったらしい。

「で、マジにどうすんの？ まだプレイして一時間しか経ってねーけど。時間加圧を抜きにしても、現実ではあと一時間五十分も残ってんのか。金の無駄だなー」

「うあ、そうだった……四田ちゃんに怒られる……」

現状を思い出して、つい頭を抱えてしまう京だ。四田ちゃんの厚

意が重たい。

熱中すれば時間加圧の十二時間だって過ごせるものらしいが、ハマり込めないとこれほど拷問と感じる長さもない。感覚的に一日の半分を費やすのはある意味時間の無駄だ。

「とはいっても、緑の子はさっさと別の電子回線に出かけてしまいましたし、このままだと本編を続行できないでしょう？」

「もういいじゃん本編なんて。どうせサイキックフォースー守護天使聖女と俺たち四人の誰かが奇跡を起こして終わりなんだからさ。どうせなら楽しい話とか色んなこととして遊びたいなーって俺は思います！」

ぐーたらなことを言っただけに頼ずりを仕掛けてくるルイから何気なく顔を逸らす。やっぱりこの人、触れている相手を愛玩動物かなにかと思っているんじゃないだろうか。

一応、と前置きをつけて虎丸が案を出す。

「風吹のポジションはツリートモードにしておけば、本編進められるけど」

自律AIが何らかの理由で不在の場合の代替措置として、ツリートモードがある。

自立的に思考して返してくれるAIと違って、こちらは用意されたテキストから最適なものを選んで応答を返してくるだけという、旧時代式の補助機能。そこに意思はなく、語源は魂を持たない操り人形という『吊り糸』から取っている。

普通に考えれば、人間と同等の思考を持った電子体と交流したいのに、あらかじめ決められたテキストを読み上げるだけのNPC——つまり意思のないノンプレイヤーキャラクター——と遊ぶのはつまらない。

打撃音を伴ったドリブルを挟んで、虎丸が気負いのないシュートを入れる。また外れた。

「やらやめて、映像浮上すればいいし」

えー、と不平不満の声をあげてルイがオモチャを取られまいとするように抱きついてくる。グリグリと頭を撫でられ、京の首がふにやけた。

こんな風に、在りし日の学校で誰かと腐れているのも、結構面白そうだ。

「今回は時間まで遊ぶつもりです。四田ちゃんのおごりだし。それに、」

「それに？」

鸚鵡返しに聞いてくる虎丸の、灰色の瞳が瞬いた。演技じゃなく、面倒を見てしまうのは彼の性分なのかも。彼の瞳に不思議そうな色が浮かぶまで見つめていた。

「圭太とのことを人前で喋ったの、初めてで……。当たり前だけど、知ってくれたのは貴方がたが初めてなんです。だからもうちょっと貴方と一緒にいたいなって」

目付きの悪い眼が丸くなる。ボールを持ったまま虎丸の動きが二秒くらい固まった。

言ったあとで自分で照れてしまい、京は思わずはにかむ。

これを機に、ゲームや自律AIに対してずっと抱いていたモヤモヤ感を取り払ってもいいかもしれない。後ろ向きな考えばかりに囚われるのは疲れた。

色んなものに心のアンテナを伸ばし、楽しむこと。

それは大事な気持ち。失恋にいつまでも押し潰されていい感情じゃない。

だったらこのゲームを楽しんでみようじゃないか。今はそう思えてくるのだった。

和やかな微粒子に自然と笑みがこぼれた時。

「で？ ただのんびり過ごすだけで、お金もらえるんですか？」

「誰！？」

いきなり見知らぬ声が側頭部にかかってゾツとする。

いつの間にか背後を取られていたらしく、京の顔のすぐ隣からヌツと顔を突きだしている少年がいた。一瞬生首の幽霊に見えて、京は悲鳴を飲み込んでしまった。

どうしてこの世界の電子体はそろってホラーな登場をするんだろう。心臓に悪い。

新キャラと思しき少年の短髪は、頭上に広がっている青い空の一番深い部分と同じ色合いをしていた。セピア色の瞳は穏和に伏せられ、唇から紡がれる言葉は落ち着いていて慇懃。外見だけならばまさに王子様系。

京とルイがパツと離れて自然と体育館の中に後退ると、王子様少年は薄く微笑んで「どうも」軽く会釈を送ってくる。

えーっと、と不躰ながらメニューウィンドウを呼び出して確認する。画像の中のバストアップ画と、目の前に佇む青髪の少年を照らし合わせた。目にかかりがちな前髪をヘアピンで留めている以外は、紹介画と一致する。

彼が最後の攻略候補キャラ、遠野佑のようだ。

「えーと、佑さん？」

「はい、初めまして。可愛らしいお嬢さんですね」

ニコリと返す微笑が素敵だったものだから、微妙に照れて視線が泳ぐ。どうやら彼も見ろに見かねて出てきてしまった様子。

驚きなのは、彼がルイよりも一つ年下だという点。物静かな十七歳もなかなか美味しい。

そういえばさっきの言葉を思い返し、疑問が沸いた。彼らの世界に貨幣が必要だったか？

「自律AIもお金もらうんですか？ てっきり無縁のものだと」

「人間の生産物を買う際に必要なんです。風吹くんがアニメグッズを買いにいったでしょう。人間が制作した、金銭取引が発生する世界のもの。……なので、これでも管理局から給金が下りるんですよ。本業をこなせば一番手当てがもらえるというわけです」

「なんかいいよホストクラブみたいですわね……」

今日は夢をよく壊される日だ。恋愛バーチャルシミュレーションがしばしば夜のお店に例えて中傷されるのを見かけるが、あながち間違っていないことを今ので痛感する。

「でも、あなたと素敵な時間を過ごせるなら、お金なんて小さなことです」

「いや、さっきと言ってることが違……」

甘ったるい笑顔を浮かべた王子様少年、佑が体育館に踏み込んでくる。彼の手が支えているハードカバー本が、空気を叩く音を立てて閉じられた。

なんだか妙な臨戦態勢に入られた気がして、京は距離を空けようと後ずさるも、逆に佑に詰められた。ルイとはまた違う色香に、京はしどろもどろに手を振った。

「あの、佑さん。そんな、取って付けたような接客されても困りますってば」

「そうでもない。だって見てくださいよ」

ひやり、とした指の感触が京の頬から首の動脈を撫でる。その仕草は誘うというより、宝物を矯めつ眇めつするように、うっとりしたニュアンスなのが気になった。

佑の唇から陶醉した熱がこぼれる。

「白い肌の下に透けて見える血管……ふふふ」

ね、狙われてる……!? しかもアブノーマルな線で。

パツと撫でられた部分を押さえると、佑はちよつと残念そうに手を引いた。

「変態じゃないですよ。僕は生きた人間の血管が好きなんで。特に女の子の」

「変態ですよ!」「変態だねー」「この変態」

三重奏にも及ぶレッテル貼りにも、院長息子設定の少年はめげない。書物の表面を慈しむように撫でながら、ちらりとこちらを窺う目。

「ところで、京さんはロールプレイを続行するんですよね? このまま本編を遊ばずに、僕たちとダラダラお喋りするだけ? それとも何か一つ遊んでいきますか?」

いざ問われると、どうしたものかと悩んでしまう。

彼らとどうやって過ごそう。のんびり駄弁りながらくつろぐのもいいし、サイキックフォースー守護天使聖女を演じてバカゲーシナリオに興じるのも、たぶん良いと思う。

ただどちらにも共通するのは。

「緑の子……風吹くんもいないと、ダメですね……」

たった一分程度の接触だったけれど、緑髪のアニオタ少年もまた濃い性格をしていると察するのは充分だった。彼ともぜひちゃんと会ってみたいと思う。

京の意図を思わぬ形にして汲んだのは佑だった。

「だったら風吹くんをとっ捕まえにいけないじゃないですか。ツリートモードはそもそもよっぽどのが起きた場合に切り替わる仕様で、本来はまず表に出てこない機能です。今時NPCとお喋りはつまらないと思いますよ」

彼は実になんてことないような口調で言っただけでしまった。

「この場合、仕事中に勝手に遊びに出かけた風吹くんが悪い。ええ、悪いですとも。だから彼を連れ戻しにいくのは至極当然の流れなわけで、京さんにとっても息抜きになるんじゃないでしょうか。あなたが楽しんでもくれることが大事ですから。あとは知らない」

ずいぶん無責任な言葉が最後の最後で出てきたような。

しかし、大人びているが言っていることはかなりメチャクチャなので、京はさらに頭を悩ませる羽目になった。

「まさかじゃないけど、風吹くんを追いかけに外の電腦世界に行こうと、誘っているんですか」

「なにか問題でも？」

「軽く言ってますけど、なーんか大変そう」

それはあらゆる電腦空間を自由に行き来している自律AIには可能なことかもしれない。

しかしカフェの一端末から映像潜水しているに過ぎない人間が、簡単に他の回線にアクセスできるのか。というかやっていいことなのかどうかも、分からない。

そもそも京は、ダイレクトに電腦世界へ意識を繋げたことはないのだ。

そのことを説明すると、佑は小鳥のように首を傾げて考え込む。ボンヤリと希薄な表情の向こう側では、めまぐるしく蓄積された情報が渦巻いている。

「電腦世界に住民IDは登録されていますよね。していなかったら逮捕ですし。だったら、V・Sで遊んでいる最中でも、電腦世界にアクセスして買い物ができます」

「え、そうなんですか？」

初耳だった。京もV・Sカフェを使いこなせているわけではない。「ええ。ユーザーの要望に一秒でも早く応えるために、プレイ最中に気に入った関連商品があればすぐに検索して買えるようにするシ

ステムなんですよ。そのため、カフェからでも電腦世界と回線は繋がっているはずですよ」

今更ながらに感心した。そんなシステムがあったなんて知らず、今までスルーしていたので。店頭販売やオンラインショップで気ままに買い物するだけじゃダメなのか。

気に入ったら即買いなんてスピードショッピング、堪え性がないと思う。

「そもそも電腦世界は現実世界と同じ、基本的にはあらゆる場所と繋がっていて、いつでもログインとログアウトができる全チャンネル開放設定。当然、問題がなければ公共カフェとも繋がっています。それはもうV・S系に限らず、色んな主旨のカフェが回線接続の許可を得ているのです」

流暢に説明する佑からは、営業スマイルじみたものを感じた。京を後ろから抱きかかえているルイが、ふむふむと相槌を打っている。一緒に講義を受けているみたいに思えて京は密かに楽しかった。

「元々人間の利用者のほとんどはカフェからログインしてますし、だから心配せずとも心置きなく電腦世界に潜っていいんですよ」

まあ普通はホイホイとV・Sプレイ中に抜け出す人はいないんですが、と佑は補足するものの、じゃあ行きません、と言ったら弾圧しそうな雰囲気を感じている。

「いこうよ京ちゃん、ワイワイできるって楽しいじゃない。なにことも挑戦だとルイさん思うよー。普通にロールプレイするより、良い思い出になりそう」

ルイは華やぐ笑みで京の手を握ってワルツのステップを取り始め、虎丸は渋い顔をしているが黙ったままなところからして異論は無いらしい。

場の空気は確実に電腦世界に抜け出す方へと動いていた。

風吹が必要だと言ったのは京なのだけれど。大丈夫なんだろうか、本当に。

「ちょっと緊張しますけど……じゃあ、案内お願いできますか？」
「まかせてよ！ 楽しませてあげる、ずっとここにいたいって言うくらいに！」

子犬ばかりにはしゃいでホッペにキスを落としてくるのを、京は苦笑をもって受け入れた。受け入れるしかないほどルイの行動は素早かった。

「てめー脳内花畑、ちょっかいだしてんじゃねー」

そのあとに虎丸がキレのある動作で鉄拳をルイの腹にヒットさせたのも素早かった。

こんな調子で本当に大丈夫だろうか、改めて溜息を一つ。

「でも」

一番手っ取り早い方法は、

「やっぱり他の乙女ゲーに変えようかな……」

ボソッと呟いた瞬間。

ルイの指先が空中に出現したウインドウを縦になぞる。

レイティングコードが解除された。

第4話 電子の海・機械のクジラ・オンラインショップ

視覚化した電腦世界は、初めて見た京にとって、まさに電子の海そのものだった。

マリンブルーの海中を、光の粒子が絶え間なく流れていく。さざ波の形に揺れる日差し、たゆたう泡沫、見たことも無い綺麗な色合いの魚が齒車を廻して回遊する。

旧時代の海をイメージしたという電子の海は、心を奪われる美しさを成していた。

透明なガラスチューブが動脈のように海を貫通していた。中で水平エスカレーターが色んな姿をした意識たちを自動で運んだり、もどかしいと感じる意識は自ら滑空して目的の場所へ向かっていく。

幾何学的に枝分かれしたチューブが辿り着く海域には、空間を切り取った無数の窓。

ポップなメッセージがずらりと並んで客を呼び込む窓もある。テクノなポスターが定期的にアピール内容を変えて、電腦世界の動きを知らせている。

チカチカと、遠くで信号が瞬いていた。あれは誰の意識が発するサインなのだろうか。

前に水族館で体感した人工現実感、海中トンネルを歩いた時に似た浮遊感が、京を優しく包んでいた。

ただ、今の京は頬を赤らめて自分の体を抱きしめていた。少し離れたところに立つ少年達に背を向けるようにして服を掴む。電腦世界に出たことで、自分の姿は住民IDとして登録している等身大の姿に、自動的に切り替わっていた。

「こんな辱めを受けるなんて……。お嫁にいきません!」

「問題はアンタを拾ってくれる男がこの世にいるのかという」

飄々と憎たらしいことを言つてのけた虎丸の脇腹へ、怒りの裏拳を叩き込む。

「もおー……いきなり三人がかりでくすぐるんですもん。私、膝裏が特に弱いのに」

レイティングコードを解除されたことで、抑制されていた感度が限りなく現実の自分のものと近くなった。

結果、体育館に京の過呼吸気味の笑い声が盛大に木霊したのだ。

そのときのことを思い出しているのか、ニヤニヤ笑いでルイが親指を立てる。

「悶える京ちゃん、とってもグッドだったよー。今度は運動マットの上でやろう」

「いやらしい想像しか働いてこない提案は却下ですよ! 死ぬかと思つたんですから」

「そこが人間の面白いところだねー。神経過敏というか、笑つて死ぬつてすごい現象」

ワシヤワシヤと妖しく両手で空中をこねる金髪の天使から、守るようにして自分の体を強く抱きしめる。さりげなくこの男に胸を揉まれたことを、忘れはしない。

「くすぐり攻撃はダメなんです、私。呼吸困難で病院に運ばれたこともあるくらいで」

「へーそうだったんだ。それはごめんね。くすぐりに弱いって教えてくれたの、トラだったからさ、つい」

教えてくれた?

リアルの知人ならまだしも、虎丸くんが?

ルイさんはソレをいつ聞いたんだらう。

最初意味が分からずポカンとしていたが。それから白い布に墨を

一滴落としたような、言い得ぬ疑念が自分の顔に浮かんだのを自覚した。

必然的に視界に捉えた虎丸は、一瞬奇妙な沈黙を挟んだあと、鋭くルイを睨みつける。それを見た時、漠然とした不安に駆られた。

「もしかして、私の個人情報とか無断で見てるんじゃない……」

そうだとしても、くすぐりに弱いなんてことまで分かるだろうか。不信感もあらわに凝視すると、熱視線に耐えられなくなった虎丸が観念して両手をホールドアップ。

「京の感覚情報を、ちょっと見たただけだ。どこの感度が高いとかか低いかとか」

「そんなものまで電腦世界に流出しているんですか？」

「情報の海だし。アンタはいつの時代に生きてるんだ。電子のオブジェクトに触れるのをどのシステムのおかげだと思ってる」

「えばっていわれても困ります。そんな情報勝手に見ないでくださいよ！」

言いくるめられたことで、一応納得したが、やってることはプライバシーの侵害だ。

説明はされたものの、何故か不安感の心の浅いところで留まったままだった。いつの間に見られたのだろう。

煮え切らない気分をムリヤリ押し込め、釘を刺す。

「……まあ、プレイヤーの女の子を楽しませる一環とはいえ、あまり個人情報を見られるのは良い趣味ではないですね」

「悪かった。気をつける」

それでこの話題は一区切りついてしまっ、なんとなくに流れた。言葉数も少なく黙り込む虎丸に釈然としないものを感じる。

不意に肩をトントンと叩かれ、視線を外す。見ればルイが赤フレームの眼鏡を正しつつ、弾んだ調子でガラスの向こうを見るように促していた。

「それより、ほら、京ちゃんはクジラ見たことある？ 電腦世界の

ノイズを掃除してくれる、この海域のヌシだよ。定期メンテナンスにちょうど出くわしたみたい」

チューブの向こうを泳ぐ青い影の存在に、京の興味もあつという間にそちらに向いた。

大型の機械仕掛けの体が、波打つ光を神秘的に浴びている。

「わぁ……。大きい！」

「圧倒されるよねー」

思わずこちらがぎょつとしてしまう大きさと、泰然とした海中遊泳に惚れ惚れする。

流線型の体軀には色んなものがくっついていた。見えるだけでも、パラボラアンテナ、頭部で回っている光波標識は灯台だろうか、金属の表面を覆っているのはたぶん苔。電子の海にふさわしい、へんてこなクジラ。

うお……。ん

巨大な水棲生物がゆっくりと鳴いた。

遺伝子の奥で眠っている感情を揺り起こすような、懐かしい鳴き声。

クジラの声に耳を澄ませるうちに、不信心はなりを潜めていった。京の脳裏を埋め尽くすのは、はるか昔の海の情景と、水圧で籠もった音響世界だったのだ。

電子仕掛けの世界には、現実で失われたたくさんの宝物が息づいている。

うつとりと両耳に手を当てて浅く目を伏せる京。その姿をやや離れたところから、三人の少年が眺めていた。

ルイの夢見るような目が、佑の謎めく微笑んだ目が、そして虎丸の死んだ魚のように炯々とした目が。

それぞれ静かに少女を射貫いていることを、本人だけが知らない。

そこは水族館の中のように薄暗い空間だった。

延々と続く通路の側面に、規則正しく並んだ固化ウィンドウが一面に広がっている様は壮観。ウィンドウに記述された商品内容を吟味する客の輪郭が、青白い光に照らされてボンヤリと浮かび上がっている。

目を夜光塗料のように光らせた小魚が、体をくねらせて通路を巡回していた。

オンラインショップを視覚化した場所、その一角で電子フィギュアの項目を漁っていた少年が、京達を探していたところの風吹だった。

話しかけると、風吹はヘッドホンを首まで引き下ろし、訝しげな顔で応じる。

「は？ 誰だお前」

開口一番、無礼極まりないことを口にした風吹にゲンナリしてしまう。仮にも自分の出演する乙女ゲーに遊びに来たプレイヤーなのだから、顔くらいAI的記憶力で覚えておいてほしい。

「あなたのソフトにお邪魔しているプレイヤーですよ。こんなところで脂売ってないで、帰りましょう」

風吹は京と同年齢設定のはずだが、身長は高くない。むしろ京と同じくらいで、子供っぽい顔つきをまじまじと眺めることができた。いかにもやんちゃ系って感じだなあ。

背後についてきているお仲間を見て、再び京に視線を戻したときには、風吹もようやく事態を飲み込めたらしい。ついでに京のことも思い出してくれた。

「だって、ゲームしないって言ったじゃんか」

「明言はしていませんよ。あとでじっくり考えたんですけど、思い切って遊ぶのもいいかなーって」

スツと固化ウインドウから手を離れた風吹の目が、挑むように細められる。

鼻息一つ、風吹は腰に手を当てた。

「あのさあ、地味なお前が乙女ゲーでちやほやされたい願望を叶えようっていう気持ちは分かんなくてもいい。だけど現実を見てみるよ、なにも変わっちゃいねー。結局お前は鈍くさい小娘のままなんだよ。もっと大人になろうぜ？」

いきなり攻略対象に説教をかまされるなんて思わなくて、言葉を失った。

背後でルイの声が「俺が大人にしてあげるよー」と恐らく笑顔で言ったと思うけれど意味合いが違うのでスルーした。しかも佑あたりは電子書籍に心を囚われはじめているらしく、「七番通路ちよっ」といってきますね」とか別行動宣言を吐いたので虎丸に張り倒されていた。いかにも、本来の自分は乙女ゲーには無関心なんです、と言いたげな振る舞い。

自由すぎる男性諸君に対し、京は顔を真っ赤にして張り叫ぶ。

「お、大きなお世話です！ それに恋愛バーチャルシミュレーションは『しょせん疑似恋愛ゲームだ』って概念を持ち出すなんて、いつの時代の人間ですか！ 私だって恋したことあるんですから……、あなたたちの世界の人を、好きになったことあるんだから……！」
むしろ反応をくれない二次元に執着する風吹こそ、旧時代の観念に囚われた生き物じゃないか。今にも泣きそうな涙を押し込めて、じっと風吹を睨みつける。

そんな京を援護するように言葉を挟んだのは、佑の首根っこ掴む赤毛少年。

「色んな思惑はあっても、突き詰めれば純粋に娯楽を求めてプレイヤーは来てんだ。俺たちにもそういう『現実では叶わない憧れを求

める』って部分があるだろ。人間世界のもんとかに手を出したりさ。そもそも乙女ゲーの仕事をないがしろにしたら、風吹の大好きなアニメグッズが買えねーって話だし」

「虎丸くん……」

電子体にも、『現実』では叶わない憧れがある。恋と同じように。それは電子体も人間と変わらない生命体であることを強く教えられた気分だった。

確かに、ちやほやされたい願望があることは一概に否定できず、けれどその卑しい願望をやんわりとした表現でフォローしてくれた虎丸が頼もしい。サバサバとした姿勢のなかに、彼なりに考えるところもあって、さりげない気遣いを回すところに好感を持っていた。「ていうか、勤務時間中に堂々と買い物にでかける風吹が全面的に悪いと俺は思いまーす」

後ろから伸びてくる両腕が、京の体を抱きしめる。まったくこの金髪少年は隙さえあればところかまわず抱きついてくる。甘えたがりの猫みたいだった。

二人の正論を前にして、風吹から悔しげな呻き声があがった。彼の手が閲覧中の固化ウィンドウを叩くと、ズラリと並ぶ一覧表の中にウィンドウが戻っていく。何かとこちらを監視していた小魚がゆっくりと通常巡回に戻っていくのを見送り、

「わーかったよ、戻るよ！ 目的のものは予約したし。それでいいんだろ泣き虫姫！」

「京です！ 勝手に不名誉な渾名をつけないでください、アニオタチビ！」

「言ったなこのおにゃのこめ、そのカワイーお顔ぶっさいくにしてやるよお！」

「それはこっちのセリフです、その小学生みたいな美顔を間抜け面にしてやります！」

組んずほぐれつの取っ組み合いで、お互いの顔を引っ張ったり歪

めたり。かなり不毛な喧嘩を始めた二人を、ルイは「仲良しさんだねー。混ざりたくないけど」と笑い飛ばしていた。

「外に出て四〇分経ってます。残り時間は人間時間で一時間ですか……そろそろ帰還したほうがいいのでは？　まだ居るなら、そのあいだに書籍のコーナー見にいつても……」

電脳世界に出た瞬間から、V・S内で駆動していた時間加压設定は無効になっているため、通常の時間を過ごしたぶんだけ利用時間も減っているのだった。

小首を傾げる佑の言を、風吹と京はまるで聞いてはいない。髪を引っ張ったり関節技を決めたりしていると、しまいには巡回から外れた別の小魚が騒音警告を発する。

『館内ではお静かにお願いします』

いがみ合っていたのが嘘のように、風吹と肩を並べてしょんぼりするのを、またもやルイがお腹を抱えて笑い飛ばす。

「二人とも、なんか姉弟みたいで可愛いーねー」

即座に風吹から舌打ちがもれた。

「冗談、なんでオレがこんなヤツの弟なんだよ。せめて兄にしろ」

「そういう問題だったんですか。その線でいくならあと十五センチは身長のはしてからほざいてください」

「地味子」

「アニオタ」

「バーカ」

「やんちゃ受け」

「誰が受けだ誰が！」

肩を落としつつも、京は俯き加減からまだ風吹とガン飛ばしあっていた。その視線が何気なく周囲に走ると、虎丸の思い詰めた表情が視界に入る。こちらをジッと見つめる目。

どうしたのだろう。聞こうとして、やめた。

その唇がふと何かを呟いたからだ。聞けないほど小さくてよかつたと思うのはたぶん間違いではなく、彼の驚くほど冷めた、それで

いて羨望の目に何となく居づらいものを感じて顔を逸らした。
自分、なにかまずいことでもしてるんだろうか。

第5話 食べ物市場・崩れる心・ハレルヤ

色んな姿の意識が談笑しあう、和やかな空間があった。

膨らんだガラスチューブの一角に、休憩所とおぼしき広いスペースがある。そこから一段下を見下ろすと、モダンな屋台がずらっと並んで広場を形成しているのが見える。表示されたポップアップウインドウがポンポンと音を立てて客引きをこなしていた。この場合の店員とは飾りだったり、料理のパフォーマンスを見せるためにいるようだ。

食べ物市場。京たちが一息いれるために選んだ場所は、そう呼ばれていた。

明らかにやる気なさげな風吹を連れ戻してロールプレイするのも何となく萎えたので、すぐには戻らずに寄り道することにしたのだった。

ん、と差し出されたアイスクリームをお礼を言って受け取る。舐めるとストロベリーの味がほんのりと口内に広がった。ストロベリーというよりサクラ味という薄さだが、それでも京は満足だった。

現実世界より、味覚が鈍く設定されているのが電脳世界の特徴だ。実際の体の空腹が埋まるわけではないので、電脳世界の味覚データで満腹になってしまうと現実世界で肝心の飲食をおろそかにする危険性が生じる。それを防ぐためらしい。

手の中にあるカップのアイスクリームを見下ろす。カップの側面に張り付いた水滴も、溶けかけたアイスの表面も、実際にすくって食べる感触も味も温度もなにもかもが現実のものと見分けがつかない。

電腦世界で食事の回数をこなしていれば、ダイエットになるかもしれないと思った。実際、電子料理ダイエットなる記事が出回っていたことを思い出す。

そのことを、アイスを買ってくれた虎丸に嬉々として提案したら、至極呆れた顔をされてしまった。いわく、

「なんで女って、ことごとく体に悪い痩せかたを試そうとするかね。普通に栄養バランスを考えて食って運動すりゃあいいのに」

「虎丸くん、こういう言葉があります。――無駄な努力」

「バツサリいったなアンタ」

それからいきなり虎丸の手が京の腰の肉を揉んだ。服越しとはいえまったくの不意打ちだったので、京はつい口に含んでいたアイスを噴きだしてしまった。

噎せ返る京には目もくれず、虎丸は飄々とこんなことを言い放つ。

「別に余計な肉とかついてなくね。胸は貧相だが」

「……。これは電腦空間仕様にデフォルメ補正がかかってるだけです。本当の私はもっと腰もくびれてて、胸もボイーンと出てて、顔も可愛くて、男の子からもモテて……」

「京さんよお、理想のワタシを語ってるところ悪いが……それは幻想だ」

衝動的にアイスクリームを食った。一気に食べたせいで米神がキーンと痛み、トントンと手根骨で側頭部を小突く。アイスクリーム頭痛なんて、無駄に凝った再現がされていることに半ば感心した。鈍痛がひくと、ホッと溜息がもれる。

ふと今の自分の状況を実感した京は、久しぶりに心が弾んでいることに気づいた。

最初はただ、惰性で乙女ゲーをやるうとしただけなのに。

いつのまにか変な男の子達とこうして電腦世界に遊びに出かけている。

「こんなに楽しい気分になるなんて、映像潜水する前は思いもしなかったです」

本当に、ここは。

「青い空があつて、蒼い海があつて、魚が泳いでいて、昔の学校があつて……今の時代には失われたものがこの電腦世界には息づいてるって不思議な感じです。それでいて、アイスの味とか、声の反響とか、匂いとか……現実にあるものが、生々しく再現されてる」しみじみしていると、隣で虎丸もまた感慨深く呟いた。

「映像潜水してきた人間はよく言うぞ。どっちが『現実』だろう、って」

「どっちも現実ですよ。だって今じゃ、電腦世界にだってあなた方のような意思を持った命が暮らしているわけですし。どっちが優れてるとか、劣ってるとか、そういうのは分かりませんけど……」

京は冗談めかして笑った。

「私、電腦世界も好きですよ。このまま居てもいいくらい」

視覚化した電腦世界にきたのは今回が初めてだが、もし去年に圭太と繰り出していたら、もっと好きになっていただろうか。

それともフラれたショックで逆に嫌っていただろうか。

虎丸が笑顔で何か言いかけていた。

が、それに被さるタイミングで、

「圭太の目に、この世界はどんな風に映っていたんでしょう。彼がプライベートでよくいくスポットとか、好きな食べ物とか、結局知らないままでした」

京がポツリと呟いた瞬間、波が引くように虎丸は口を噤み、無表情で正面に向き直る。

虎丸の発言を遮ってしまったことに申し訳なさを感じたが、謝るタイミングも逃したのでこちらも黙り込んだ。

ふと話題転換を思いつく。京としては、ちょっとしたサプライズに遭遇した程度の気持ちで、アイスカップを軽く掲げてみせた。

「それにしても、私が濃厚ミルクストロベリーアイスが好きって、よくわかりましたね」

そもそも京は何か食べたいものはあるかと問われ、ではアイスを、と大雑把に言ったただけだ。

偶然だろうけれど、まっすぐに買ってきたそれが好みをばっちり当てていたなどと、正直アイスクリーム頭痛よりも感心するできごとだったりする。

虎丸はすぐに答えなかった。嵐の前の静けさを思わせる沈黙を通して。

なんとなく空気を壊すのがためらわれて、彼共々手すりに寄りかかって広場を見下ろす。

広場の白い円卓では、結局電子書籍を買った佑が熱心に読書にふけり、風吹がアニメ店でもらってきたグッズカタログをテーブルに広げてはテンション高く何かを語り、フライドポテトをつまむルイに適当に茶化されていた。

平和な少年達の光景をアイスをなめつつ眺めていると、不意に虎丸が戯けたように切り出した。

「テレパシー」

「は？」

「実は俺、テレパシーの能力があって、京の好きなものが分かる超人自律AIなんだ」

話しについていけず隣を見れば、明らかに冗句を言ったと分かる明け透けな笑みがある。灰色の瞳が悪戯っぽくこちらを見ていた。

「そうだったら面白いと思わねー？ 人間がスーパーマンに憧れるみたいにさ、電子体——自律AIもそういうことを考えんの。すごい能力があったらいいなとか、特別なフォーマットだったらよかったのにか」

虎丸がゆつくりと視線を外し、僅かに目を伏せて自嘲する。

「俺が特別だったら、好きな子の気も引けるのかな、とかさ」

京は目を丸くした。この物言いはまるで。

「好きな人、いるんですか？」

便宜上、乙女ゲーの攻略対象キャラである彼らにとって、恋人とはプレイヤーのことだ。

しかし彼らにも意思がある以上、一人の女性を好きになるのは当然の道理だった。

だから虎丸達は乙女ゲーの攻略対象キャラであることを、『仕事』と呼んでいるのだろう。

内に秘める感情を反映して、虎丸の顔がわずかに赤みを得る。

不機嫌なふりをしてツンとそっぽを向くのが可愛らしく、京はつい身を乗り出した。

「誰？ 電腦世界の子？ まさかギャルゲーの攻略対象キャラを好きになったりして」

「……ある意味、攻略対象に指定されてる、かも」

乙女ゲーのキャラとギャルゲーのキャラが、プレイヤーを置いてけぼりに恋を語らうってどんなギャグだよ。失礼ながら京が抱いた雑感がそれだった。しかしそんな不規則な組み合わせがあるからこの世界は面白いのだと思う。

しかし虎丸はじつとりとした目をしていた。

「そのニヤニヤ笑いからして、たぶん俺の心理面にそぐわない推測が立てられてるんだろうが。いっとくけど、ギャルゲーの女じゃねーし」

「ええっ、違うんですか」

「気づけよ……」

どうしてそこで本当に不機嫌になるのか。理不尽なものを感じてこちらまでブーたれる。

「少ない情報量で真理に辿り着けるほど、私は賢くありません」

一理あると思ったのか、しばらく心の葛藤を見せた虎丸は、頭上を見上げた。

淡く光る水面に台本が書いてあるかのような、芝居がかった口ぶりで告げる。

それは後から思えば、『スイッチ』が入った瞬間だった。

「そいつがストロベリーアイス好きだから、俺もよく食べるようになった。そいつが心から電腦世界を楽しむから、俺も自分の住んでるところが好きになった。そいつがアクション映画好きだって言うから、俺は基礎技術以上にアクションを身につけるようにした。そいつが膝裏が弱いって知ったから、俺はきっちり深層記憶に刻みつけた。そいつが胸ないの氣にしてたから、俺は恋人になったとき手伝ってやろうと決めた。そいつが将来結婚したら空気の綺麗な自然区画に住みたいって言ったから、俺はそいつのために電腦世界で眼鏡にかなう家も買った。そいつが……」

訥々と語られる想い。一見するとそれは微笑ましい告白にも取れたが。

京の顔が知らずと引きつった。

いきなりなにを言い出してるの、この人。

少なからず好印象だった少年が、得体の知れない生き物に見えてくる。

ここで虎丸の言う『そいつ』が誰かも勘づかないほどバカではないつもりだった。だが聞いていると、純粹な恋心というにはあまりにも不可解な問題を含んでいて、素直に喜ぶことができない。

その言い方だと、前からストロベリーアイスが好きなことを知っていたし、アクション映画が好きだということも知っている。

ちなみに『そいつ』は一度も虎丸にアクション映画が好きだと公言したことは、ない。膝裏のことも、胸のことも、将来設計も……。

「あの、虎丸くん……」

さつきから、否、彼がメニューウインドウ越しに登場したときから感じていたさりげない違和感が、ここにきて沸々と募っていく。なにか呼び止めねば、虎丸の独白を止めなければいけないような気がした。

「ちよっと、待とうよ……ねえ」

ちら、と横目に京を見て、虎丸の視線がまた正面を向く。

その唇は、一転して包み隠すものを無くした開放感で、うっすらと笑っている。

「今日そいつが来たとき、最初は諦めようと思ったんだ。どうせすぐに帰るし、人間だし、って。でもだめだな……やっぱり、欲が出てくるや。そいつがすげー欲しくてたまらない」

情熱的な言葉が、むしろ気持ち悪さを帯びている。粘液をまとった蛇がゆっくりと締めあげて、京の心を飲み込んでいく気がした。

人間と自律AIの恋。それ以前の根本的な問題として。

「あなた……どうして私のことをそこまで知ってるの……教えてないことまで、どうして」

問いかけるのに勇気を要した。自ら泥沼に浸かりにいくような不快感。

アイスクリームを食べる気も起こらず、じっと虎丸の返事を待っていた。

返ってきたのは、こちらの二の腕を掴む手と。

「だって、ずっと見てきたから。——京のこと」

異様にフワフワと定まらない笑顔だった。頬を差す桜色は妖艶をたたえている。

陰鬱な色っぽさに京の背筋があわだった。

「アンタのことならなんでも知ってる。でも俺が知ってる京は、これからさきも俺を見ることはない。それが分かってたから、この気持ちに煙らせることしかできなかった。諦めるしか無かったんだ。昨日までは」

甘い吐息が少年の唇からこぼれる。

「……でも本物の京は幸運なことに、俺のいる乙女ゲーソフトに遊びに来た、これはたぶん運命だと思うんだ。天文学的確率だ」

言ってる意味がさっぱり分からない。虎丸はなにを言っているんだろう？ 本物？ 俺が知ってる京？ 誰それ。京の頭の中をてんでバラバラのピースがぐるぐると回っている。

分かっていることは、虎丸が京のことを好きで、けれどそれは一朝一夕で生まれた感情ではなく、何らかの事情で京の存在を知り、何らかの方法で京の私生活を覗いた末のもの。好きな食べ物、好きな映画、くすぐられると弱い部分、色んなことを。

虎丸に対する好感度のなにもかもが覆った瞬間だった。粘着質な恋慕が京の心にのしかかり、あまつさえ窒息死させようとする。

緊張のあまり固いツバを飲み込む。

要するにこの子……ストーカー？

急速に危機感が高まった。

「わ、私は……そう、そう！ 伝説のサイキックフォーサー守護天使聖女ですよ！？ それだけのただの人間です、あなたはサイキックフォーサー守護天使聖女のパートナー候補に過ぎなくて、つまりは私情とかそういうのを挟むのは、い、いかなものかと……！」

衝撃過ぎて逆に裏返った笑いしか繕うことができない。

さりげなく二の腕を掴む手を振り切ろうとして、しかし振りほどくことができない。繋がってしまった体の一部なんじゃないかと思えてくる。

「離してください……離してっ」

強引に振り払った勢いで、カップアイスが地面に落ちてひっくり返る。溶けかけたアイスがじわじわと白い路面に染み込んでいく。虎丸の厚意を台無しにした成れの果ては、十数秒後にはキレイさっぱり消滅していた。路面に広がった染みも含めて。

一步距離を離れると、虎丸は子供っぽい笑顔で首を傾げた。出来の悪い絡繰り人形を連想させる動作に、不気味なものが込み上げてくる。

「あれ？　もしかしてアンタ、怯えてる？　なんで？　どうして？　俺は好きだって言っただけなのに？　なんでそんな目えしてんの？　俺のこと怖がってる？　嫌ってる？　バージョン1の京はそうだった、俺を怯えた目で見てた、近づかないでって拒絶してた」

一步近づかれる。京は一步下がる。また一步近づかれる。下がる、近づく、下がる、近づく……。その間も虎丸は無邪気に笑っている。「でも今日の前にいる『京』は違う。俺と一緒にいたいと言ってくれた。あいつじゃなくて、俺と。すごく嬉しかった、『心臓が張り裂けそう』ってこういう気分なのかと思うくらいに。だったらいいだろ、このまま一緒にいてもさあ。そうだよ、ずっとここにいればいい。俺は京が望むことをしてやれる。だから、電子プログラムに囚われない心も行動も体も表情も感覚も、アンタの全部を俺にくれよ。……聞いている？」

聞いている。そこから得た京の感想はこれに尽きた。

狂ってる。

異常な恋慕を語っている自覚が、虎丸にあるのだろうか。

相変わらず話の核心部がぼやけていて、なにを前提に喋っているのか京にはわからない。しかし自分の身に危険が迫っていることだけは嫌でも認識させられた。

さらに距離を置こうとして、焦った足がもつれて尻餅をついてしまった。尾てい骨から痺れた痛みが駆け抜け、しかし京はそれどころではなく虎丸を愕然と見上げていた。

「虎丸くん、どうしちゃったんですか……。あなたは、つつい他人の面倒をみてしまう優しい人で、私にも優しい言葉をかけてくれて……。き、キャラが変わってますよ？　おかしいですね？　あは、は……」

我ながら引きつった笑い声が痛々しすぎて聞いていられない。

ふと、虎丸の瞳がすうっと細められた。冷淡な目で京を見下ろし、声もワントーン落ちる。京の脳内に警鐘が乱反射した。

逃げないと。

「その目、むかつくなあ。逃げるとき目の目だ。利用時間が過ぎたら、そそくさとカフェから退散して、もう二度と俺の乙女ゲーV・Sには映像潜水しないって考えてる顔。当たってる？ 正解？ 京のことならなんでもわかるから当たり前だし。じゃあ逃げるんだ？ 誰から？ 俺から？ 俺は京になにも危害なんて加えねーよ？ じゃあなんで逃げるんだ？ ……怖いことなんてなにかあったか？ 京さんよお」

こちらにユルユルと伸びてくる手がヤケに遅く見えた。幽霊が捕まえにくるかのような恐怖を帯びたその手から、何とか逃げようと必死に這いずるも、上手く後退できない。

とうとう京の口から絹を裂くような悲鳴があがった。それでも迷いなく伸びてきた手がとんでもない速さで首を鷲掴みにし、ぐっと喉を押し込むように圧迫する。

今、危害加えないって言ったのに！

「いやいや、近所迷惑だから。ホームに戻ったらたくさん可愛がつてやる、OK？」

OKじゃないよ！ その意味も込めてブンブンと力の限り首を振っている。

「あらー？ どうしたの京ちゃん、トラあ」

まるで今の緊迫した状況にそぐわない花畑の妖精のごとき声が、背後の頭上から降ってきた。

ムリヤリ仰向けに見上げれば、金髪のアナウンサーが愛らしい顔を驚きに染めている。膝に手を置いてまじまじと拘束されている京を観察。自由人過ぎるところはこんな時でも健在だった。

「悲鳴が聞こえたからきてみれば、君たちなにやってんのー」

ルイさんなら助けてくれる。女の子の味方だもの、設定的にはある意味女の敵かもしれないけれどそんなことは小さなことだ。

京は咄嗟に虎丸の手を根性で首から引剥がし、咳き込みながらも助けを求める。

「けほっ、助けてください、ルイさん……！」

「んー？ 誰から？」

「虎丸くんがっ……彼、様子がおかしくて、普通じゃない……」

「普通の定義ってなにか、人が思う普通と自分が思う普通が違えば定義も変わってくると、」

「ルイさん！？」　なに呑気に哲学にしこんでるんですか！　考えてほしいのはそこじゃねーですよ！」

あらん限り叫ぶと、ルイは苦笑して「まあまあ」と宥めてきた。

それから京を挟んで佇む虎丸をチラと見、溜息を一つついて京の両脇に手を差し込む。

「とりあえず立って立って。やっぱり二人きりにするべきじゃなかったのかもねー。トラあ、京ちゃんが好きなら大事にしなきゃだめだよー。可哀想に、すごく怖がってるじゃないか」

手を貸してもらいながら、いまいち力の入らない体で立ち上がったが、ルイの諫言のなかに違和感を覚えて思考が鈍る。

「えっと、ルイさん？」

「ん、なあに？」

汚れなどこの世界では付着しないか、しても数秒で消えるのだが、形式的にルイが身繕いしてくれた。京の衣服をただし、二つ結いの髪を背中に流してついでに頬を撫でくるその手を、京はゆっくりと引きはがす。

「あの、その言い方だと虎丸くんの気持ちとかその辺のことについて、理解していたようなのですが」

いっときの空白。なにを思ったのかルイは平手を打って嬉々とし

た告白を始めた。

傍からすればトチ狂っているとは思えない告白を。

「……。あ、大丈夫安心して、俺も京ちゃんのこと好きだから。バージョン1の京ちゃんしか知らないけど、君、すぐく守ってあげたくなるオーラ出してんのよ。具体的に言う不幸体質？ 迷子のみすばらしい猫が俺の手で段々元気になっていくのがもう嬉しくて嬉しくて……。って、あれーどこいくのー、おい京ちゃんー」

途中からうっとり目を閉じて語り出したところで、京は本能的に退去を選択。

なにが安心してなのか理解不能どころか、ルイまでもおかしなことを口走り始めて、いよいよ自分のいる場所が実は幻想的な場所ではなく恐怖の蠢く世界だと実感してきた。

バージョン1ってなに、ルイまで自分のことを知ってて、しかもあずかり知らぬところで親睦を深めているなんて、どうなってるの。とにかくもう嫌だ、逃げないと、この世界から逃げないと。

スタスタと早足で階段を下りると、慌てた動きでルイが追いついてくる。横並びになったところから祈りの手でお願いのポーズ。

「あのさあ、トラのこと好きで良いから俺のことも好きでいてくれない？ バージョン1はあの子ばかりに懷いてて、俺のことは良いお兄さんぐらいにしか見てなかったからさー。頼むよー」

「出前みたいに軽々しく言わないでください。それって二股じゃないですか。好きになれと言われて簡単に好きになれるわけない」

「えー？ それプレイヤーの君が言っちゃう？」

「ていうか、誰があなたたちみたいないカレた人を好きになるもんですか！」

この際だからばっさりと切り捨ててやる。しかし言った後で、これは完全に逃げ切れると確信した状態で吐き捨てたほうがよかったかもしれないと微妙に後悔した。

案の定ルイはショックを受けてションボリとうなだれてしまったし、さらに背後のほうで空気がねじくれて変質したのが伝わってきた。しまったからだ。

虎丸が危険な行動に出るまえに、京は一気に走り出す。

その際に一度だけ脇見を振ることを自分に許した。

「大体、あなた方が言ってる『あいつ』とか『あの子』って誰なんですか！」

あとはもう追いつかれないように全力で食べ物市場を突っ切るだけ。そのことだけを考えるように努めた。余計な詮索はもうようそう、気持ち悪い事実しかそこにはないのだから。

「あれ、みーやん？ どこ行くんだよ、おい」

砕けたニックネームで呼ばれる風吹が、カタログから顔をあげて呼び止めてきた。この異空間にしてはめずらしく悪意のないトーンに不覚にも泣きそうになる。申し訳なく思いつつも無視して逃走を続行。

背後で少年達が追ってくる足音が打楽器のように忙しく響いて、加速度的に恐怖を増させる。「風吹、京を捕まえろ！」「はあ？ なんで」慌ただしい会話は不穏しかなく、捕まったらとてつもなく吐き気のする末路が待っているそう。

さっきまでそれなりに仲良く過ごしていたのに、なんで、どうしてこんなことに！

「たすけて……っ、だれか……圭太……」

弱々しい声が、切れた呼吸の合間にこぼれ出た。

肉体的な疲労はそれほどでもない、その代わり精神のほうに参加して過呼吸気味になっている。地味とよく言われるが、実は運動神経に自信があった。そこから転じてアクション映画が好きになったほどに。

しかし背後の少年達に追いつかれるのも時間の問題だった。多勢に無勢、一人の力などたかが知れている。なによりこんな生々しい危険に遭遇したことなど今までに一度たりともなかったのだ。

京の感情を反映した電子の瞳が次第に潤んでぼやけていく。脳裏に浮かぶのはかつて自分の全てをあげたいと思ったほど好きになった自律AIの少年。

彼がここにいたら、どんなに救われただろうかと胸を痛めて、

「え……」

京は間拔けな声をあげた。全力で走っていた足が、茫然とする心に従って速度を落とし、惰性になり、やがて立ち止まる。

クレープ屋の前に見慣れた人影がいた。

こちらに半ば背を向けた格好は、しかし京が欲してやまなかったあの人に酷似している。

初め、ぼやけた視界が見せる錯覚なのかと思った。潤むものを指先で拭ってみた。

しかし視線の先にいる人物はくっきりと存在している。

人影が立ち位置を変えたことで、疑惑は確信に変わった。

ちらと見える素朴で優しい表情、柔らかいライトブラウンの髪、ちよつと野暮ったい眼鏡を押しやる仕草もまた可愛くて。

まさか、そんな。唇が震える、救いの光を前にたちまち胸がいっぱいになる。電子の海の狭間でこうして再び出会うことになるうとは。

「うそ……」

ああ、神様。

「圭太！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0370z/>

さくら色ドロップ

2011年12月29日01時54分発行